

## 教養の森、インゴルシュタットの森

天野 雅郎

1

教養とは？……と、あらためて自問自答をするならば、さしあたり思い浮かぶもの、それは遙か、インゴルシュタット (Ingolstadt) の近傍の、奥深い、森の中の風景である。とは言っても、それがドイツの、ドナウ川流域に位置を占め、バイエルン州の南東部 (すなわち、オーバーバイエルン) ではミュンヘンに次いで大きな、第二の都市となっている、現在のインゴルシュタットのことを意味している訳では、さらさら無い。それどころか、それはドイツが、いまだドイツではなかった時分の、言ってみれば、ドイツ以前のドイツに存在し、15世紀の後半以降、三百年に及ぶ「大学都市」として名を馳せていた、18世紀の末年のインゴルシュタットであり、さらに言えば、そこから二十年ばかりの時を経て、やがてメアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』(1818年)の中に姿を見せる、あの「怪物」(monster = 警告者)の彷徨 (さまよ)う、インゴルシュタットの森であった。

17♦

と云えば、それが当時の、この「大学都市」に暮らし、そこで不可思議な、それにも拘らず、この頃の自然科学 (原文: natural philosophy = 自然哲学) の粹を極めた方法で、人間の死体と死体を繋ぎ合わせ、文字どおりの「人造人間」を産み出すことになる、あのヴィクター・フランケンシュタイン (Victor Frankenstein) と、彼によって生を享けた、名も無い「怪物」の物語であることは、すでに了解済みであろう。また、このようにして産み出された「怪物」の、あまりの醜悪ぶりに驚愕し、そのまま無責任にも、この天才的な科学者——そして、いまだ大学生でもあった主人公が「怪物」を放り出し、置き去りにすることで、哀れにも「怪物」は町を逃れて、野を流離 (さすら)い、とうとう森の中の山小屋に身を潜め、そこで幸運にも、彼が「人間になるための教育」を受けることになる経緯こそ、この物語の前半部分の、まさしく頂点 (クライマックス) であったことも。

さて、このような書き出しで、この一文を始めたのには理由がある。……と云えば、これまた慧眼 (ケイガン=炯眼) の読者には、お察しの通りに、この数年来、和歌山大学の教養教育は「人間になるための教育」(the art of being a human)

という名を宛がわれ、その一方、専門教育は「専門家になるための教育」(the art of being a professional) という言い換えを用いられ、今に至っているからである。この間の事情については、いずれ機会を改め、説明をすることにして、ここでは簡単に、この「人間になるための教育」の意味づけと、その機能を、明らかにしておきたい。すなわち、どのような時代にも大学が、いわゆる専門家（プロフェッショナル）の養成機関として成立し、その意味において、それが専門教育の場であるにも拘らず、それと共に大学は、なぜ繰り返し、どのような状況に遭遇しようとも、そこから教養教育の機能を切除し、排除してこなかったのかを。

ちなみに、メアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』においては、そもそも「大学」(university) は中世以来の、伝統的な「学部」(faculty) である、神学部と法学部と医学部に分かれ、これらの内の、いずれかの学部に進学するための予備部門として、いわゆる「自由学芸」(liberal arts) が置かれ、そこには文法と修辞と弁証 (= 論理) の「三学」と、算術と幾何と天文と音楽の「四科」の、あわせて「七科」 (= 自由七科) が含まれていたはずである。したがって、この物語の主人公 (ヴィクター・フランケンシュタイン) も、当然、大学入学以降、これらの「自由学芸」を修めてから、将来は医学部に進学する目的を持っていたに違いない。が、結果的に彼は、入学の翌朝、幸か不幸か (原文に即して言えば「偶然か——それとも、むしろ破壊の天使の、悪しき誘いか」) 自然科学の教授の門を叩き、そこから一步一步、化学 (chemistry) への道突き進むことになる。

◆ 18

この日から、自然科学 (natural philosophy) とりわけ、もっとも広い語義における化学が、ほとんど唯一、私の心を占めるものとなりました。私は、この学科について、現代の探究者たちの書いた、天分と眼識に溢れる著作を熱心に読みました。大学の講義にも出席しましたし、多くの科学者 (man of science) に面識を得て、親交を深めようともしました。〔中略〕私の精進は、当初は不安定で、不確実なものでしたが、努力を続けるに連れて、力強さが加わり、たちまち熱烈な、激烈なものになっていきました。その結果、星々が朝の光の中に姿を消す時まで、しばしば私は自分の実験室で研究に没頭していたほどです。〔改行・中略〕このようにして、二年が過ぎました。〔中略〕科学の誘惑 (enticement of science) は、これを経験した人でなければ、理解することが叶いません。〔中略〕科学の追求には、絶えざる発見と驚異との、糧 (かて) があるのです。

このようにして、彼は自然科学の世界へと足を踏み込むことになる。もっとも、その際の自然科学は、原文では自然哲学と表記されており、いまだ18世紀から19世紀への移行期には、このようにして科学 (science) と哲学 (philosophy) とは同一視され、その境界も役割分担も、明瞭ではなかったことが分かる。と言うよりも、むしろ科学が哲学から切り離され、これまた幸か不幸か、そこに自然科学 (natural science) という名が冠せられ、そのような科学 (=自然科学) が排他的に、哲学でもなければ、自由学芸でもない……という道を辿り出すのは、やがて19世紀という時代が弾き出す、総決算に他ならず、そこから今度は、この自然科学を範と仰ぎ、社会科学 (social science) が頭を擡げるに至るのも周知の事実である。現在、このようにして二百年に及ぶ、凱旋行進を続けている科学化 (scientification) を、私たちは別名、専門化 (specialization) とも称している。

問題は、そのような専門化に対して、もともと「特殊科」学であり「個別科」学である「科」学 (department = 学科) に向かい、その是非を問うことに、あるのではない。そうではなくて、そもそも専門化という事態に際して、これに諸手(もろて)を挙げ、私たちが楽観的に賛同できるのであれば、話は別であるが——むしろ逆に、そこに一抹の不安や危惧を感じざるをえない時、そこに一種の予防策となり、安全弁ともなるはずの「自由学芸」が、もはや『フランケンシュタイン』の時代においてすら、ほとんど形骸化をし、無力化をしていたことが問題なのである。そして、それは裏を返せば、このような専門化の背後で、それまでの学部(神学部・法学部・医学部)が、本来の専門家 (professional = 宣誓者) の養成機関としては機能せず、どんどん専門家が偏狭な、その名の通りの特殊家 (specialist) へと変質していく過程が進行していた、ということにもなるであろう。

そうでなければ、どうして『フランケンシュタイン』の主人公 (Victor → Jupiter = 勝利者) が、中世以降、連綿と受け継がれてきた大学の、伝統的な学問に飽き足らず、まさしく「現代のプロメテウス」 (the modern Prometheus) へと変貌を遂げることなど、起こりうるであろう。しかも、それは独り、このプロメテウス (=先見者) の仕出かした……「人造人間」の創造という、奇々怪々な企てではなく、それを宇宙の神秘の解明や、生命の原理の探究と置き換えれば、それは19世紀から20世紀へと引き渡された、世界の大学の趨勢であった点も否み難く、とりわけ、そのような傾向が日本の大学において、はなはだ顕著であった点も、疑いがない。おまけに、そこから私たちの国が取り返しの付かない、言ってみれば、人類最悪の破局 (catastrophe = 転覆) を迎え、なおかつ、その大惨

事に加担をし続けたことも、記憶に新しい、たかだか七十年ばかり前の出来事であった。

このようにして振り返ると、そもそも大学 (university) という場において、そこに人間の持つ、普遍的 (universal) な宇宙 (universe) への関心や関与や、ひいては支配への欲望が、渦を巻いていることは昔も今も変わらないし、それは詮ずる所、文字どおりの人間性 (human-nature) に含まれる、自然の営みである、と見なすことも可能であろう。ただし、それが結果的に限界を超えた、人間中心主義 (humanism) に姿を変え、そこから科学万能主義や技術万能主義が招来されるのであれば、それは科学や技術の、変節以外の何物でもないし、逆に言えば、それは人間疎外 (dehumanization) 以外の何物でもない。——と、このような事態を『フランケンシュタイン』の中で、すでに作者のメアリー・シェリーは、一人の自然科学者 (と言うよりも、自然哲学者) の口を通じて、いまだ大学に入学した直後の主人公に向かい、以下のように諭 (さと=覚・悟) していたのである。

君の精進が、君の才能に見合うのなら、君は疑いもなく、成功することが出来るでしょう。化学は、自然科学 (natural philosophy) の分野の中でも、これまで最も大きな改良が成し遂げられてきましたし、これからも成し遂げられていくに違いありません。そのためにこそ、私も化学を専門に学び、研究を続けてきたのです。でも、それと同時に私は、それ以外の科学 (science) の分野をも、決して等閑 (なおざり) にしてはきませんでした。人間の知識 (human knowledge) の一部門だけに関心を向けていたのでは、私たちは気の毒な、はなはだ憐れな化学者 (chemist) にしか、なれません。君の願いが、本当に一人前の科学者 (man of science) になることであり、単に、つまらない実験家 (experimentalist) になることではないのであれば、私は君に、数学 (mathematics) を含めて、あらゆる分野の自然科学に勤しみ、精を出すことを、助言するでしょう。

◆20

### 3

このように書き記した時、作者……正確には、父親 (ウィリアム・ゴドウィン) と母親 (メアリー・ウルストンクラフト) と、さらには結婚相手 (パーシー・ビッシュ・シェリー) の名を繋ぎ合わせ、最終的にはメアリー・ウルストンクラフト・ゴドウィン・シェリー (Mary Wollstonecraft Godwin Shelley) と呼ばれることになる、この作者は高々、18歳から19歳の頃に過ぎず、おまけに、女性であっ

た彼女には、大学への入学歴もない。と言うことは、このような「大学都市」(＝インゴルシュタット)で暮らしている、教授や学生の姿を、そして、彼らの人間観や学問観を、彼女は主として自分自身の読書体験と旅行体験から描き出している、と見なさざるをえない。と言うよりも、このようにして当時の自然科学の粋を極めた方法で、一人の大学生が「人造人間」を産み出すことになる物語を、この作者は自分自身の想像力(imagination)を駆使して、表現していたことになる。

この事実は、この『フランケンシュタイン』という物語に即して言えば、やがて「人造人間」がインゴルシュタットの森の中で、誰が置き忘れたのかも分からない、革の旅行鞆(portmanteau)を拾い、そこに衣類と並んで、以下の書物を発見することになる経緯と重なり合っている。その書物は、ミルトンの『失樂園』とプルータルコスの『対比列伝』(通称『英雄伝』)と、それからゲーテの『若きウェルテルの悩み』の、それぞれフランス語訳であったが、これらの書物を読むことで、まさしく「人造人間」の知性(intellect＝中間選択能力)は、各段の飛躍を遂げることになる。が、それは彼自身が、みずから「怪物」であることを自覚し、確認する過程でもあれば、自分自身の存在根拠に向けて、問いを発する行為でもあった。——「俺は、誰(Who)だ?俺は、何(What)だ?俺は、どこから(Whence)来たのだ?俺の旅(destination＝運命)は、どこへと通じているのだ?」

21♦

このような問い掛けが、結果的に『フランケンシュタイン』の主人公の耳に届くのは、やがて「怪物」がインゴルシュタットの森を離れ、はるばる主人公の故郷である、スイスのジュネーヴへと辿り着き、そこで主人公の弟(ウィリアム)の首を絞め、殺し……その挙句、この事件の巻き添えを喰い、召使い(ジュスティーン・モーリッツ)までもが無実の罪を着せられて、処刑台の露と消えてしまっただけのことである。この間の経緯については、この物語を読者の一人一人が、辿り直していただくことに期待をするしかないが、この場で強いて、蛇足を加えておくと、もともと「警告者」を意味している「怪物」(モンスター)は、この物語の主人公によって産み出され、それにも拘らず、彼によって置き去りにされ、さんざんインゴルシュタットの森の中を流離った末に、いつしか「人間になるための教育」を施され、まさしく一人の「人間」となって登場する、という点である。

どうやら、この場面を描き出すに当たって、メアリー・シェリーは当時のヨーロッパにおいて、いわゆる認識論(epistemology＝真知論)や教育論の古典(classic＝最上級)として知られていた、ロックの『人間知性論』(An Essay Concerning Human Understanding, 1689)や、ルソーの『エミール』(Émile ou

De l'Éducation, 1762) を下敷きにしたようであるから、このような「怪物」の「人間になるための教育」には、実は 17 世紀から 19 世紀へと至る、ヨーロッパの人間論の真髓が、畳み込まれている訳である。その意味において、あくまで彼女は「人間になるための教育」が、そもそも「教育」(education = 能力抽出) の字義どおりに、この「怪物」が自分自身の熱意と努力で、はじめて手に入れることの出来た「知識」に原点を置き、しかも、その「知識」には常に——裏返しの悲しみと死への不安が伴われざるをえないことを、私たちに繰り返し、教えていたことになる。

俺は、何 (What) だ? (中略) 俺は、怪物 (monster) なのか? (中略・改行)  
このような思いに苛まれて、どれだけ俺が悶え、苦しんだのか、どうてい言葉では、お前に語り尽くせはしない。このような思いを追い払おうとしても、知識が増すと共に、悲しみも増す一方だった。おお、こんなことなら、俺の生まれた森 (my native wood) に永久に、留まっていれば良かったものを。飢えと渴きと、暑さの感覚の向こうには、いっさい何も知らず、何も感ぜずに! (改行) 知識 (knowledge) とは、何と奇妙 (strange) なものだろう! これが一旦、心に貼り付くと、岩を覆う苔のように、くっついて離れない。時には思想も感情も、すべて振り落としたい、と俺は願った。しかし、苦痛の感覚に打ち勝つ手段は一つしかなく、それが死 (death) という方法であることを、俺は学んだ。——でも、その状態に不安を感じても、俺は死を、まだ理解できなかったのだ。

◆ 22

#### 4

教養という日本語は、その起源を中国の正史 (『後漢書』) に求めたり、日本の古代や中世に使われていた、いわゆる「孝養」の別表記としての「教養」に結び付けたりしないのであれば、そもそも明治時代になって産み出された、その意味において、近代的な日本語であり、翻訳語である。例えば、この語の用例に『日本国語大辞典』(2006 年、小学館) が挙げているのが、まずもって敬宇 (ケイウ) こと、中村正直の『西国立志編』(明治 4 年→1871 年) であり、それが元来、イギリスの作家であり、医師でもあった、サミュエル・スマイルズ (Samuel Smiles) の『自助論』(Self-Help) の翻訳であったことから窺えるように。そして、その際の有名な、あの警句 (Heaven helps those who help themselves → 「天は自ら助くる者を助く……」) からも明らかな通り、この「教養」という語は出発点に即して言えば、ほとんど「教育」と、置き換えの可能な語であったことが分かる。

と言うことは、そのような「教養」という語が現在の、突き詰めれば「学問、知識などによって養われた品位。教育、勉学などによって蓄えられた能力、知識。文化に関する広い知識」（『日本国語大辞典』）を意味するようになるのは、結果的に大正時代を俟たねばならず、それは今から、ちょうど百年前の出来事であったことになる。しかも、それは折しも——人類が史上最初の「世界戦争」（World War）を体験することになる、その前後の時期であり、言ってみれば、そのような「戦前」と「戦中」と「戦後」の端境（はざかい＝刃境）期に、この「教養」という語は現代的な日本語として産声（うぶごえ＝初声）を挙げたことになる。そして、その際の代表的な教養書に名を連ねたのが、西田幾多郎の『善の研究』（明治44年→1911年）であり、阿部次郎の『三太郎の日記』（大正3年→1914年）であり、倉田百三の『愛と認識との出発』（大正10年→1921年）であった次第。

そのような時点から、まるまる百年（century＝世紀）の時間が流れ過ぎ……それにも拘らず、いまだ二番目の「世界戦争」を目の当たりにしていなかった時代においては、この戦争が一名、それを特徴づける「化学兵器」（chemical weapon）と、その「化学兵器」を産み出した「化学者（chemist）の戦争」と呼ばれたり、あるいは、もっと端的に「化学戦争」（chemical warfare）と称されたりした時代に、はじめて「教養」は姿を見せる。この事実は、私たちが「教養」という語の歴史を辿り直し、その意味を問い、その機能を論（あげつら）う折にも、決して忘れてはならない事実であり、要するに、それは21世紀の「教養論」の出発点でもあれば、到達点でもあって、この事実を等閑に付し、あたかも「教養」を非歴史的（non-historical）な、観念的で抽象的な、いわゆる自由学芸や、その翻訳語である、リベラル・アーツに置き換えるのは、それ自体が時代錯誤であろう。

言い換えれば、このような「世界戦争」が勃発する時点——見方を変えれば、私たちの前に「教養」や、その「教育」が姿を見せる時点は、ちょうど私たちの生きている、この現在から遡れば、百年前の出来事であり、逆に、あの『フランケンシュタイン』の書かれた時点からは、ちょうど百年後の時点である。おそらく、そのような「百年」という時間の単位の中で、目下、私たちは「教養」や、その「教育」の森の中を彷徨っているのであり、これまで日本の大学が、この六十年余りの間、一方では「一般教育」という名で「教養」を蔑ろにし、また、その一方では「大綱化」以降、きわめて偏狭な専門教育や職業教育が復帰を遂げつつある中で、そこに納まりの付く話をしていないのではない、という点を肝に銘じ、本稿は幕切れとせざるをえないが、その前に、ふたたびインゴルシュタットの森の中で、

あの「怪物」が人生で最初に出会う、書物との邂逅の瞬間を引いておこう。

この、驚くべき物語〔ヴォルネー『諸帝国の没落』〕は俺の胸に、奇妙な感情を呼び起こした。人間は実際に、これほど力強く、高潔で、崇高でありながら、それと同時に、これほど悪質で、卑劣な存在であったのか？ 人間は、ある時は単に、悪の原理の申し子のように見えたし、ある時は思い付きうる限りの高貴さや、神々しさを身に纏って現れた。偉大で、高潔な人間であることは、繊細で、敏感な存在に宛がわれうる、最高の名誉であり、卑劣で、悪質であることは、そのような多くの人間が記録に留められてきたように、最低の不名誉であり、盲目のモグラや無害なミミズよりも、ずっと惨めな状態のように見えた。どうして人間は、自分の仲間を殺しに出掛けていくのか、また、どうして法律や政府があるのかさえ、長い間、俺には想像も付かなかった。だが、悪徳と流血の詳細を聞いた時、俺の驚きは止み、俺は吐き気を催し、憎悪で顔を背けたのだ。

◆ 24



Frankenstein, Universal Pictures, 1931